

## 凶作

冷夏と旱魃

・歴史を左右するも・

昨年は冷夏が景気回復の足を引つぱり、今年の夏は一転して猛暑が景気の後押しをした格好となった。昔は旱魃 かんばつ や冷夏による凶作が飢饉に直結したが、南北に長い日本列島では稲作への影響の度合いが地方によって大きく異なる。東日本や北日本では 旱魃 に不作なし、雨年に豊作なし」といわれ冷夏長雨に弱く、逆に西日本では旱魃に弱い。その違いが、歴史が大きく変わる節目に微妙に陰を落していた。

源平の覇権争いの幕開けとなった源頼朝挙兵の年は、西日本ではひどい旱魃に見舞われており、記録によれば今年のように六月は前半に雨が降っただけで、七月八月は雨無しとなった。西国に地盤を持つ平氏には旱魃型凶作で打撃となり、東国を地盤とする源氏に有利に働いた。そして実りの秋を終えた十月の富士川の戦いでは、水鳥の飛び立つ羽音に浮足だった平氏が戦わずして敗走した。

逆に幕末には天保から慶応にかけて冷害

型凶作による飢饉が続き、幕府の基盤である関東から北日本を直撃したが、反幕府勢力が多い西日本では米の減収は少なく明暗をわけた。

明治維新の直前の慶応の凶作のときは、コメ相場が 一挙に五倍にハネ上がるという狂乱物価となり、幕末の騒然たる雰囲気をかもしだし、社会の流動化が進んで明治維新への背景となった。

浅間山の噴火で追い討ちをかけられた異常気象で天明の大飢饉が続いた頃、フランスでも寒い夏、春先の熱波、異常寒冬と異常気象が相次いだ。小麦の不作がからくるパンの倍以上の値上がりがきつかけとなり、**パンを…**」の声とともに、フランス革命への導火線となったバスター・ユ襲撃となった。

フランス革命も明治維新も歴史の必然で変わるべくして変わったが、その背景として異常気象による凶作が歴史の転換を後押ししたことになるのだろう。